

## 第50回

### 高齢者向け住宅の計画－談話室の計画－

近畿大学 建築学部  
准教授 山口 健太郎



#### 【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て2008年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011年4月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

個人空間が充実しているサービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）では、共用空間よりも住戸での滞在時間が長くなりやすい。共用空間の利用は食事のみであり、食べ終わるとすぐに住戸へと戻ることが多い。心身の健康を保つためには、より歩き、より話すことが重要であり、サ高住には食堂に加えて多様な人々と交流できる共用空間が求められている。

さて次に、下記の3つの写真はいずれもサ高住の談話室である。もっとも利用頻度が高い談話室はどれだろうか。部屋の面積、内部のしつらえ、建設費という点からみると、いずれも和室（写真1）、ソファコーナー（写真2）、ベンチ（写真3）の順に安くなる。

写真1：プライバシーが確保できる和室

写真2：食堂に併設されたソファコーナー（テレビあり）

写真3：玄関付近の廊下に設けられたベンチ。

我々の調査からすると答えは写真3の玄関付近にあるベンチであった。もっとも小さく安上がりな場所が最も使われているという結果となった。設計者が作



写真1



写真2



写真3

り込んだ場所ほど使われていないというのは残念であるが、どこのサ高住でも工夫次第では簡単に居場所をつくることができると考えると興味深い結果である。

では、このような結果を引き起こした行動原理について考えてみたい。そこには場所に対する参加の自由度と、付帯行為の有無が大きく関与している。参加の自由度とは、「ふらっと気軽に立ち寄れる度合い」であり、付帯行為の有無というのは「ついで」の行為と考えてもらえるとわかりやすい。和室は、靴を脱いで入らなければならない、部屋になっているため一度入ると立ち去るタイミングを計りづらい（特に他者がいる場合）。その点、ベンチであれば気軽に座ることができ、立ち去ることができる。場所に対する参加の自由度が高い空間ほど使われやすい。

次に付帯行為とは、壁に掛けられてある掲示物やテレビが媒体となり発生する行為である。例えば食堂のソファコーナーのテレビが付いており、スポーツ中継を見ている人がいる場面を想像してもらいたい。あまり知らない者同士でも、「どちらが勝っていますか?」「〇〇ですよ」「〇〇はすごいね」と言いながらソファに腰かけ、並んでテレビを見ている姿を容易に想像することができる。人はテレビの存在に引き寄せられ、無意識のうちに交流をとっている。廊下に掛けられた掲示板や、ちょっとした水槽なども同様に、それぞれの物品がきっかけとなり会話や交流を誘発する。

実際の調査でも玄関脇のベンチでは、「買い物からの帰りに、休憩のために少し座っていると、同じく帰ってくる人に出会い、そこから会話が生まれる場面」や、「食事が終わり自宅に向かう途中で掲示板を見ていると、話しかけられそのまま座って長時間おしゃべりをしている場面」が見られた。玄関脇のベンチはサ高住内の主要な動線上に位置しており、座っていると誰かとおしゃべりできる憩いの場となっていた。

このようなちょっとした居場所は、玄関部分だけではなく、郵便ポスト（写真4）やフロントデスクの前（写真5）、階段やエレベーターの前（写真6）など、利用頻度が高く少し立ち止まる場所に設けると効果的である。



写真4

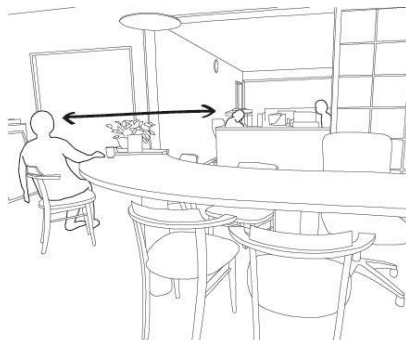


写真5



写真6